

Title	感染症が変える野生生物の観光利用
Author(s)	敷田, 麻実
Citation	Wildlife Forum, 25(2): 9-11
Issue Date	2021-03-15
Type	Journal Article
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/18027
Rights	Copyright (C) 2021 「野生生物と社会」学会. 敷田麻実, Wildlife Forum 2021,25(2),p.9-11
Description	

感染症が変える野生生物の観光利用

敷田麻実 北陸先端科学技術大学院大学



写真1
キタキツネへの接近(北海道札幌市)

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大は、私たちの生活スタイルを変え、基本的な社会認識、考え方も影響を与えはじめている。2008年のリーマンショックとは異なり、誰もが、否応なしに当事者になり得るのが感染症のパンデミックの現実だ。

一般に感染症と関係がないと思われてきた野生生物だが、エコツアー現場などでの人から野生生物への感染など、人畜共通感染症は従来も指摘されていた。今回のコロナウイルスの感染の端緒は野生生物だといわれており、改めて野生生物と私たちの関係の持ち方も問われている。

感染症の急拡大で世界が変わったように見えても、オンラインミーティングやリモートワークのように、それ以前から兆しがあったことに、アクセルを踏んだというものも多い。そこで、この「コロナショック」をきっかけに明確になった(と思える)野生生物と私たちの関係を考えてみたい。

接近欲求の反転

エコツアーリズムやネイチャーリズムの現場では、観光利用による

インパクトを軽減するために、野生生物と一定の距離を保つことが必要だった。身近で鯨を見た客と、迫力ある体験をさせたいガイドの思惑は一致し、「動物側の意向」は無視される。そのため野生生物への接近は、ホエールウォッチングなどで規制が議論されてきた。

こうした野生生物への接近は、観光客の見た目という願望がベースになっていたが、スマートフォン(以下「スマホ」)の時代に入り、見ることに先にある記録とシェアが欲求を支配しはじめている。観光客はそこにいることの証明のために、さながら現地レポーターのように、野生生物に接近している(写真1)。それはシェアしたものを見る不特定多数の他者のニーズに答える「社会的行為」になり、「シェアするために接近しているよね」という理由付けができる。シェアという欲求が生まれたことで、接近はますますコントロールしにくくなっている。

安全な体験への希求と当事者意識

一方、感染症の拡大とともに、観光現場での社会的距離の確保など、安全な体験がより重視されている。



写真2
愛嬌のあるヒグマのイメージが(北海道土幌町)

特に仮想世界での野生生物体験が
果たして私たちの野生生物との関係を
豊かにするののかという懸念は大きい。

見る側が安全を保ちつつ、野生生物
に接近することを追求するための工
夫が進められている。これは、安全
に観光したい願望の表れであり、エ
コツアーなどの野生生物観光でも、
それを満たすことが基本的な要求に
なっている。

その究極は、こちらが安全な場所
において野生生物を見る、リモートツ
アーやオンラインツアーを含むバー
チャルなツアーリズムである。観光客

が現地に行かないのなら、前述した
野生生物へのインパクトもコント
ロールでき、野生生物保護の立場か
らは「めでたい話」なのだが、これ
には課題もある。

特に仮想世界での野生生物体験が
果たして私たちの野生生物との関係
を豊かにするののかという懸念は大き
い。バーチャルな体験はビデオカメ
ラやセンサーを通して観光地を訪問
するため、参加者が準備段階を踏む
ことなく参加できる。また参加者の
判断で一方的にシャットダウンする
こともできる。スクリーン上から消
えた瞬間にツアー参加の当事者性は
なくなる。それは兵士がドローンで
操縦して遠隔地から標的を攻撃した
直後に、何事もなかったように帰宅
して家族と食事する「非当事者性」
と同じである。

理想的な体験への没入

観光地で野生生物を見ることは、
「あれを見たね」という体験を手
に入れることだ。写真に撮ることは、
自分で記憶する代わりに。ハー
ドディスクなどの外部記憶装置と同
じく、いったんそこに保存しておけ
ば安心というわけだ。そして写真は、
その記憶を思いだす、つまり記憶再
生のためのきっかけとして使われて

きた。

その際に私たちは体験を再構築し
ている。都合がよいように書き換え
ることができるのだ。外部記憶であ
る写真も、加工技術の向上で都合よ
く記憶を書き換えることができるよ
うになった。体験を記録や再生する
主体は観光客であり、加工すること
もできるので、理想的な体験が創り
出される。

さらに、理想の体験を創るために、
観光客は必要な資源を調達する。そ
の結果、今まで観光体験でのハイラ
イトつまり主役だった野生生物は、
体験のための演出素材のひとつとし
て「背景化」される。優れた演出の
ために提供される野生生物は、無害
で愛嬌もあり、操作可能なイメージ
に変換されているので影響は少ない。
だがそれは、既に観光地の土産物店
や展示館に現れていたイメージでも
ある(写真2)。大きな違いは、そのイ
メージを不特定多数の個人がシェア
し、理想的な体験の創造のために自
由に使っていることだ。

シェアするために見る野生生物

ICTの進歩とインターネットの
普及、特に2008年からの国内で
スマホ販売と2010年以降の
SNSの利用が、観光体験を劇的に

変えてきた。中でも「シェアするため」に写真を撮る」「シェアするために観光する」が拡大した。日常生活でも交わされる「映える」は、シェアした写真や動画が誰かに見られることを前提にしている。しかし、それを一方的に批判してはいけない。もともと私たち研究者は論文や学会発表するために調査に出かけてきたからだ。ある意味で、シェアするためにフィールドに出かけていた。研究のための調査ということで正当化してきたが、よく考えれば、今の観光客がしていることとたいして変わらない。私たちは、好奇心旺盛な観光客にもっと寛容になってもよいのではないか。

新しい関係への期待

野生生物の観光利用は、「リアルな野生生物との関わり」から、「野生生物との理想的な関係の追究」に移りつつある。その関係は、観光客、つまり人側の理想型の投影でできている。リアルだが現実ではない。その一方で、獣害対策に悩む地域では、今も「生々しい」関わりを抱えている。住民とのクマとの遭遇事故も現実である。この矛盾の中で、私たちの理想の投影から創られる野生生物像が果たしてこれからの関わりを担

えるのか。いや、リアルな野生生物とイメージの野生生物が既に共存している現実の中で、どのようにすれば理想と現実を両立できるのが課題である。コロナウイルス感染拡大で見えてきたのは、野生生物と人との関係の再構築である(写真3)。



敷田麻実
 しきだあさみ

北陸先端科学技術大学院大学 教授 高知大学農学部卒業後、石川県庁に勤務、金沢大学大学院修了。1998年に石川県を退職、金沢工業大学教授を経て、2007年から北海道大学観光学高等研究センター教授。2016年から現職。野生生物保護学会会長(2005-2011年)。専門は観光資源論と地域マネジメント。「地域資源を守っていかすエコツーリズム」「はじめて学ぶ生物文化多様性」ほか論文多数。



写真3
 キタキツネを介した人と人のコミュニケーション(北海道斜里町)